

理者は、土地の売却、営業拠点の移転、土地の購入、賃貸業の開始、駐車場への転換など、いくつかの行動を選択せざるを得なくなった。彼ら意思決定者の選択に大きな影響を与えたのが、経営多角化への指向と金融機関からの十分な融資の有無であったという。

一方、第6章の市街地周辺地域の土地利用変化では、1980年代には農村的な土地利用が卓越した。その後、住宅、マンション、店舗、事務所、駐車場などの都市的な土地利用の転換が進んだ。土地所有の意思決定者との関連でみると、マンションや店舗などのへ土地利用変化は、交通条件の良い土地を所有する地主が、土地を活用したいという強い意思のもとで、土地の賃貸をはじめたことに大きな要因があった。また、住宅への土地利用変化は、幹線道路から相対的に離れた小区画の都市を所有する地主が、土地売却の依頼に応じたために生じた。

このように人を介した土地利用変化が生き生きと記述されるのは、実証的なデータに裏付けされた考察のためである。しかし、この書評で紹介できるのは、結果のほんの一部にすぎない。土地利用を扱う後学が注目すべきことは、結果ばかりでなく、データの取得と提示の方法、および行動科学的な手法を用いた分析など、研究を遂行するための一連のプロセスである。それを学ぶためには本書を実際に手にとって熟読する必要がある。

これら都市と都市周辺部の結果以外にも本書では、空間的・時間的に多様な視点を盛り込むことにより、意思決定者の行動選択に基づいた分析が包括的になされる。それらを概観すると、伝統的漁村における園芸農業の発展過程(第2章)、自然条件からみた土地利用変化(第3章)、地方中心都市の土地売買と土地利用の関連(第4章)、政令指定都市における地域外資本の流入プロセス(第5章)などである。そして、第8章では、個別の事

例に共通する土地利用変化のメカニズムが総括される。さらに、第9章では、今後の土地利用変化に関する研究において有効なツールになりうるGISの実践的な活用方法が、メルボルン市と松山市の事例で紹介される。

いずれにせよ人文現象に関する土地利用は、目に見える時間スケールで絶えず変化しており、今後も人文地理学とその関連分野の研究者にとって研究の対象が枯渇するという心配はない。土地利用変化の要因を、それに直接関わった意思決定者に注目し、彼らの行動の時期・契機・条件を詳細に分析することから解明した本書は、地理学ばかりでなく土地利用を扱う広い分野で活用できるものである。(仁平尊明)

湯澤規子著：『在来産業と家族の地域史－ライフヒストリーからみた小規模家族経営と結城紬生産－』古今書院。2009年1月刊, 238p., 5400円(税別)

本書の著者湯澤氏は、ライフヒストリーを方法として用いた研究により、「地理学における人間像追究の新たな方向性を明示した」として日本地理学会から奨励賞が授与された¹⁾。本書は2004年12月に筑波大学大学院歴史・人類学研究科に提出された学位論文「結城紬生産地域における家族の役割とその変化－ライフヒストリーからみた暮らしの論理と紬生産－」に若干の加筆修正を加えたもので、著者が卒業論文研究から続けてこられた研究の集大成にあたる。評者は著者による論文²⁾を初めて読んだとき、聞き取りと紬の断片と個人の『機織帳』を用いた繊細で丹念な分析から、織り手の生活が生き生きと目に浮かぶように感じ、深く感動したことを覚えている。のちに著者が調査先で「表面ではなく、もっと深く理解してほしい」と言われたことが結城紬に関わる一連の調査の原

点となり、湯澤氏の研究スタイルに繋がっていたことを知る³⁾。評者は著者の発表される論文から、研究手法や内容に加えて研究に対する姿勢をも学んできたため、まさに待望の書である。

本書の内容を目次で示すと、以下の通りである。

- 第Ⅰ章 序論
- 第Ⅱ章 結城紬生産地域の歴史的展開
- 第Ⅲ章 結城紬生産地域の構造と地域的特徴
- 第Ⅳ章 小規模家族経営の構造と論理
－紬生産維持のメカニズムとしての家族内分業－
- 第Ⅴ章 暮らしの変化と紬生産地域への影響
－高度経済成長期と紬生産－
- 第Ⅵ章 結論

以下、各章ごとに内容を紹介していきたい。まず第Ⅰ章において、問題の所在および先行研究と本研究の位置づけが述べられている。結城紬生産地域は家族内分業の形態で小規模生産のため統計的にも捉え難く、これまでほとんど家族内分業の実態を詳細に検討したものがなかったという。その理由として、結城紬生産地域は工業地理学的な枠組みから空間的に把握しようとする視点が注がれてきたこと、及び地理学において家族や人間の特徴が地域や産業の説明要素となることが稀であったことを、著者は指摘する。その点を克服すべく提示されたアプローチは、地域は「個々の人間活動の積み重ねの結果である」という視点に立ち、個人と家族と産業の相互関係を考察することを通して、結城紬生産に従事し、地域に暮らす一人ひとりの人間像やその暮らしのあり方を地域の問題として捉え直(10頁)す視点である。その手法としてライフヒストリーが用いられている。著者は、ライフヒストリーに資料としての価値を与えるために①紬生産を暮らしという一つの総体の中で捉え、②口述史を客観的に分析しうる史料を加えて再構成し、③一人のライフヒストリーを

家族・地域・歴史という三つ関係性の中に位置づけて分析した。著者の研究のなかでライフヒストリーが単に聞き取りによる情報にとどまらないのは、まさにこのためである。

第Ⅱ章および第Ⅲ章では、第Ⅳ章・第Ⅴ章を「より立体的で生き生きと(14頁)」描くために、結城紬生産地域の歴史的・空間的位置づけを行っている。第Ⅱ章では、対象地域が結城紬の生産地域として確立した明治中期から昭和戦前期にかけての時期(第2節)と、結城紬生産地域の再編成が起こった第二次世界大戦後の時期(第3節)に分けて歴史的推移が概観されている。対象地域において明治中後期は、享保以降の流通機構の混乱が安定し、開港による綿織物生産地域の衰退のなかで紬生産の比重が高まり、かつ機械化に踏み切らず小規模な農工未分離の農村家内工業として存続続けたという点において画期であるという。すなわち「全国的な織物生産地域における位置づけの中で結城紬生産地域としての独自の展開が始まる時期(27頁)」であった。この視点は、近代化のなかにあっても近代社会への発展段階の一過程として捉えることはできないのではないかという著者の問題意識を理解する上で重要な時期と思われる。

第Ⅲ章では第Ⅳ章以降に関連する4つの空間的特徴を提示する。まず第1節では、『本場結城紬生産構造調査書』、『本場結城紬実態調査報告書』等を用いて結城紬の生産工程とその分業の歴史的推移を示すことにより、産地内分業の中で機屋だけでなく縞屋を除くほとんどの業者が複合的な生業構造の一環に結城紬生産を位置づけていたことを確認している。続いて第2節では、紬生産地域と木綿生産地域の分布および緋柄の分布を提示し、紬生産地域と木綿生産地域は重複しないこと、結城紬の分布範囲のほぼ中央に高級品種を織る集落が集中するという地域的特徴を見出している。第3節では、産地内分業の中核的位置づけに

ある縞屋の役割と縞屋からみた生産者（機屋）の特徴を、縞屋鈴木家の経営史料「織物移入帳」から明らかにしている。特に、縞屋が集荷する紬の量は農閑期に多く農繁期に少ない点、縞屋は多種多様な柄の紬を生産地域全体から集荷していた点など、実際の経営史料を用いることで具体的に示されている。第4節では、地籍図や明治期から昭和戦前期の統計資料を用いて景観と暮らしの復原を行い、「これまで、結城紬生産は農業が零細であるがゆえの補完的な現金収入であったことが強調され」たが、「人々は農業・商業・農産加工などを組み合わせて暮らしを立てており、紬生産はその組み合わせに非常にうまく位置づけられる存在であった(89頁)」ことを導き出した。著者はこのことを一貫して本章で主張しており、結城紬生産を暮らしの中で相対的に捉えようとする視点がかがえる。

第4章は、本書の主題の一つである結城紬生産維持のメカニズムとしての家族内分業の構造と論理が、織り手の個別具体的事例から明らかにされている。特に、聞き取りと共に基本資料として用いられている結城紬の切端（第IV-7図、本書カバー）および『機織帳』（第IV-2表）は著者自身が「それまで史料として見えてこなかったものでも、ある時突然、史料として見えてくるものがある」⁴⁾と回顧しているように、一見史料的価値がないもののように思われるが、紬生産の実態を示す極めて重要な一次史料であり、本書に説得力と彩りを与えていることが分かる。

紬生産維持のメカニズムすなわち紬生産の技能を継承するシステムを、著者は家族内と地域内の二つのスケールで検討している。前者は「暗黙」のうちに「娘たちは母親を、嫁は姑が織る姿を見ながら、あるいは機を並べながら一緒に織ること」であり、後者は①近所の付き合い、講、風呂屋など女性が集まる場、②近在の農家から小学校4

から6年生ぐらいの娘を住み込みで雇い入れ教育する「住み込み」、農業や養蚕業に従事する臨時の雇い人をそのまま住み込みの織り手とする「年季」である。これらが「重層的、相互補完的に機能することによって継承されていた(153頁)」という。しかし、この紬生産維持のメカニズムは高度経済成長期を契機として変化することとなり、次章において、ある家を対象に暮らしの変化と紬生産地域への影響が考察されている。

第V章では、基本資料として主に聞き取りおよび生産者の一次史料である『売上帳』、『紬』、『糸取り帳面』および作業記録が用いられている。著者はまず、明治期から現在に至る女性三代のライフヒストリーから、高度経済成長期を契機に①家計収入や年間サイクルにおける紬生産の位置づけ（複合経営から専業化へ）、②紬生産に関わる家族内分業（家族内分業から家族+賃機従事者へ）、③紬生産の維持と継承（維持継承から廃業へ）が変化したことを見出した。続いて高度経済成長を経て生活スタイルの変化が見られるようになった昭和55（1980）年以前と以降に分け、当時結城紬生産の担い手であった賃機に焦点を当ててその変化をみている。これらにより、市場動向のみならず女性の生き方や家族のあり方からみた地域内部の状況も紬生産の動向を左右する一要因であったこと、特に高度経済成長期を経て社会全体における家族形態が変化した結果、複合的な生業構造の一部に位置づけられてきた紬生産が、少数の専業機屋として多数の賃機によって支えられるように再編成されたことを導き出した。第V章の最後に、結城市が行っている結城紬の技術習得制度とその制度に参加した織り手の例が紹介されており、結城紬生産地域の再編成の可能性が述べられている。

結論としての第VII章では、第二章から第五章までの総括と筆者による「日本における在来産業と家族」観が述べられた後、今後の課題が挙げられ

ている。

以上でおおむね本書の内容を紹介した。以下に著者の視点を評者なりにまとめさせていただきたい。1点目は、家族を単位として地域の変化を捉える視点である。人文主義地理学の登場によって人間の意識を重視した研究が蓄積された。しかし著者は行動科学的アプローチの視点から個人単位の移動や行動を分析した研究は、個々の人間に着目するというよりも、人間を平均化あるいは類型化して捉えるにとどまったのではないかと指摘する(9頁)。そこで「統計数値などをもとに平均的に捉えた人間像というよりもむしろ、豊かな表情や心情をもつ一人ひとりの人間像の把握に努め(10頁)」ることで、「一人ひとりの生きざまや家族の足跡が地域の歴史を彩り、地域の産業を支えてきた(219頁)」ことを見出した。結果的には地域の変化を描くことにつながるが、地域は家族によって構成され、家族の暮らしの変化が地域の変化をもたらすという視点は、地域を描く際の新たな研究方法を示していると思われる。地理学では集団を単位とする研究が多く、家族を単位とした研究は少ない。家族への着目の重要性を示した点で重要な研究方法である。

2点目は、人々の暮らしの変化の捉え方である。本書の中で特に高度経済成長期は、家族やその暮らしの本質的な変化の画期として扱われた。しかし、著者は地域の変化前と変化後の比較からその要因を高度経済成長期に求めたのではなく、1点目で述べたように人々の暮らしの変化とその地域への影響から地域の変化を導き出した。高度経済成長期以降の人々の暮らしの変化は一様ではなく段階的であり複雑であったという。具体的には「結城紬生産を維持してきたシステムが綻び始め、内部矛盾を孕みながらも、高度経済成長によって新たに高まった需要に対応して紬生産自体は維持された時期(165頁)」とした。時間軸や時間幅の違

いこそあれ、現在から過去を振り返った時、少なくとも現在との差異は見出される。しかし著者のように、具体的な人々の暮らしから時代の変化を捉える視点は、アナル学派の視点と共通性があるものの地理学では見過ごされがちであったように思われる。

著者は今後の課題として、①家族制度の変遷や暮らしへの影響の検討、②女性のみならず各家族構成員が果たした役割を踏まえつつ他の織物生産地域、他の産業との比較検討、③日本における家族の独自性を理解するための諸外国との比較研究、④ライフヒストリー活用方法の精緻化と新たな方法の追究の4点を挙げている。評者は②に加えて、一つの産業を取り巻く地域内の関連業種についても言及されることを要望したい。もちろん、本書第Ⅲ章においても産地内分業の中核的位置づけにある縞屋について言及されているが、第Ⅲ-2図に示された他の業種についてはあまり触れられていない。史料的制約や研究の主旨から結城紬生産地域では触れられなかったと思われるが、機屋(生産者)の変化が他の関連業種に及ぼした影響と、その結果産地としての地域の変化を捉えることで、より相対的な地域の変化を論究することが可能と考えるためである。

いずれにせよ、湯澤氏が本書で提起された、家族の役割と地域の変化を暮らしの展開との関連から導き出す視点や、ライフヒストリーの活用は、地理学に寄与するところが大きい。その意味でも議論の土台を築いた本書の価値はきわめて高い。

(橋本暁子)

注

- 1) 日本地理学会賞受賞候補者選考委員会答申(2002), 地理学評論, 75(7), vii.
- 2) 湯澤規子(2001):「結城紬生産地域における家族内分業の役割-織り手のライフヒストリーからの考察

ー」地理学評論, 74, 239-263.

- 3) 湯澤規子(2007):「ライフヒストリーによる地域調査-「語り+α」から暮らしを分析する-」, 梶田 真・仁平尊明・加藤政洋編『地域調査ことはじめ-あるく・みる・きく』126-136. ナカニシヤ出版.
- 4) 前掲注3).

合田昭二著:『大企業の空間構造』原書房. 2009年2月刊, 246p., 3,800円(税別)

ある大学院の受験生が, 構造不況業種を扱った工業地理学に取り組みたいと面接試験で返答したところ, 「衰退する産業を扱うなんてセンスがない」と面接官にコメントされたという。かくいう評者も, 企業の地理学に取り組む中で, 成長業種やリーディングカンパニーを扱った方が, 調査も(比較的)スムーズに進み, 成果も評価されやすいのではという錯覚に陥ることがある。この点について, ある年配の研究者の方に, 「人生が失敗の連続で, そこから人間が成長するように, 人文地理学で対象となる事象も, 失敗(衰退)の中に面白さが生み出される。だから成功事例だけを取り上げるのではなく, 失敗例からも学ぶことは多いはずだ」というコメントをいただいたことがある。今思えば, まさに慧眼である。

いささか前置きが長くなったが, 本書で扱われる構造不況型産業は, 景気の変動や需要の変化, 国際的な競合の進展という, いわゆる「逆境」を経験しながら, その生産体系や工場の配置, 物流ネットワークを柔軟に変化させてきた。こうした変化は, 構造不況業種のみならず, アメリカの金融危機に端を発した最近の大企業のリストラ策にも見て取ることができ, 本書の知見から得ることは少なくない。

本書の対象とする大企業が中核となって, 近接地区に立地する中小企業との間に部品調達の外注

関係のネットワークを形成する集積は, 自動車, 電機を代表とする加工組立型工業において広く展開する。その中でも, 本書は, 企業の地理学における研究成果をふまえつつ, 現代日本の「紡績」「合成繊維」「航空機」の工業3部門に焦点を当てて, 大企業が形成する「配置とネットワーク」の実証的な分析を試みたものである。産業構造の転換による製造業の配置とネットワークの変化は, 工業地理学の重要な研究テーマである。本書は各産業に対して, 適切な分析対象時期を設定するとともに, 立地, ネットワーク, 空間的分業といった経済地理学のキーワードを駆使して, 大企業の空間構造を真正面から明らかにした良書である。

本書は, 序章において大企業を分析対象として取り上げる際の研究視点を提起した後, 「紡績」「合成繊維」「航空機」を対象とした3部構成で論が展開される。

序章では, 大企業研究の重要な分析上の概念として「Multi-plant Enterprise (MPE)」と「Production System」を提示し, 従来の研究における着眼点や成果を整理するとともに, これらの研究視点を本書の中に位置づけている。

第1部(第1章)は「紡績業における生産配置の再編成」として, 多数の工場を持つ典型的な MPE として近代産業史を経過し, 産業構造の転換の中で, 工場数の減少や生産分野の転換などの多面的な立地変動を展開した紡績大企業が取り上げられる。工場閉鎖の進展と, 存続する工場の再編成および海外立地の進展が明らかにされる。

第2部は「合織工業における立地変動と企業内空間的分業」として, 二つの章(第2章, 第3章)から構成される。第2章では, 合成繊維工業の構造不況期における立地変動と生産の再編成を, 有力合織メーカーの事例から明らかにする。合成繊維生産の海外移転(特に中国への集中)は周知のところであるが, 第3章ではこうした国際競争が